

## 編集後記

『南アジア研究』第 24 号をお届けする。本号では、論文 2 本、研究ノート 3 本、書評 7 本、学会近況報告といった定番の記事以外に、巻頭特集を掲載することになった。一般に学会誌の中心をなすのは会員からの投稿論文であるが、これに加えて、注目すべきトピックや重要な学術的課題などを論じる場としても本誌を活用するため、和文雑誌編集委員会が特集などを企画してほしいという意見は、かねてより会員から提出されていた。しかし、投稿論文等の質的向上にはかなりの労力を要するため、編集委員会に独自企画を組む余裕がなかったこと、かつては編集長が毎号交代していたため、仕事内容や懸案事項の引継ぎが十全にされてこなかったことなど、さまざまな理由でこれまで実現しなかった。今回、井上が第 23 号から続けて編集長を務めることとなり、投稿論文等に対する編集委員の担当責任の分権化を推進し、インターネットを活用して簡素化した編集体制も軌道に乗り、ようやく懸案の独自企画の掲載にこぎつけたわけである。また、このような特集記事を本誌の巻頭におくべきか、中間におくべきか迷ったが、今回は初めての試みなので、巻頭特集とすることになった。

巻頭特集「デモクラシー再考」のもとになった座談会は、2012 年 10 月 6 日 7 日に東京外国語大学で開催された第 25 回全国大会終了後、約 3 時間にわたって行われた。録音起こしの分量は実質的に 400 字詰換算で約 130 枚分にもなった。これを 2 万字程度の長さにとまとめたのが今回の巻頭特集である。2 日間にわたる大会の後で、お疲れのところにもかかわらず、特集企画に快く協力して座談会に参加し、活発な討論を展開していただいた会員の皆さんには心から謝意を表したい。また、座談会の録音起こしと原稿の整理を担当し、実質的に巻頭特集の記事を作成するという大変な仕事を担当した宮本隆史さんの努力には、心から感謝している。

全国大会の動向ばかりでなく、南アジア研究全体の動向を視野に入れつつ、今後もこのような企画を打ち出していけるよう努力したい。

第 24 号編集長 井上貴子

いのうえ たかこ ●大東文化大学国際関係学部教授

『南アジア研究』第 24 号編集委員会

伊藤 融、井上貴子（編集長）、岩谷彩子、押川文子、佐藤隆広、志賀美和子、馬場紀寿、三輪博樹